

序章

児童労働の地をゆく



山地避暑都市ウーティの働く子ども

作家V・S・ナイポール (V. S. Naipaul) の作品^[1] *India: A Million Murmies Now* (*A Minerva Paperback*, 1991)を知ったのは一九九五年、南インド、バンガロールのある書店でのことである。店主との会話は弾み、わたくしが一九六一年、初めてこの美しい、静寂の漂う町に滞在したこと、それから三〇年後の八〇年代後半、この町に設置された国連関係の研究所の仕事で三年間、毎年のようにこの町を訪ねていたこと、などの話をし、そしてこれから南インド最南端のシバカシ村に児童労働の現状を見に行くことにふれた。店主はシバカシ村には子どももの反乱 (*Mutiny*) が起きている、その意味を理解するにはV・S・ナイポールの最近作を読むとよい、と一冊の分厚い廉価版を勧めた。わたくしはこのインド系トリニダード島生まれの作家が父祖の地インドに足を踏み入れ、全土を旅し、そして絶望に苛まれ始めたころの作品、*India: A Wounded Civilization* を思い出した。作者自身の、異邦人の立場でインドを見る目にはどうしても共鳴できないものを感じとった記憶がある。わたくしがカルカッタ (現在のコルカタ市) に滞在していた一九六二年、この作家は父祖の地インドに「傷ついた文明」の姿を見た。それからほぼ三〇年後の一九九〇年、再びインドを訪ね、新しい発見に感動し、大いなる変動の鼓動を読み取ったのがこの作品である。バンガ

ロールからニールギリ丘陵を經由しケララへ、さらに最南端カードモン山地 (Cardamon Hills) を再び經由して目的地シバカシ村へと長い移動の車中、「いま、百万の反乱」の意味を考え続けた。作家は言う。一八五七年の「インド大反乱」を経てインドに「自由の理念」が浸透し、「精神の開放」がもたらされた、と。そしていま、さまざまな形で無数の「反乱」が起きている、と(五く八ページ)。シバカシ村の、子どもたちの「反乱」は一体なにか。バンガロールの同じ書店でもう一冊の専門書を購入した。アメリカの政治学者マイロン・ワイナー (Myron Weiner 1931-1999) の最近作『*The Child and the State in India: Child Labor and Education Policy in Comparative Perspective* (New Delhi: Oxford University Press, 1991)』。これは児童労働と教育の問題をいわゆる「近代化論」の立場から論じた初の問題作である。先進諸国との歴史過程の比較や発展段階別の国際比較を通じインドの教育政策・行政の欠陥を容赦なく批判したためインド国内では評判は芳しくない。それだけではない。インド社会のもつ文化の多様性や複雑な歴史過程について配慮を欠いた立論に拒絶反応を示すのである。先進国がたどった西欧化・近代化という一本の道を比較の軸にすえた議論にはインドの知性は納得することはできない。「伝統から近代へ」の単線的移行、「停滞から発展へ」の単一の道ではない、「複数の道」があるという思惟方法がある。文化の多様性、価値

の多元性を認める社会がある。だから、バンガロールに集積するIT企業群と先進的頭脳があり、一方ではシバカシ村のマツチや花火の手工業と女児労働があつても不思議ではない、と。これが子どもの教育や児童労働の問題を複雑にしている原因ともなっている。

バンガロールで買い求めた二冊の著者、作家V・S・ナイポール（後にノーベル文学賞受賞）と近代化論者マイロン・ワイナーの視線の先にあるものはなにか。インド最南端シバカシ村への子どもの「反乱」探訪の始まりである。

注（一）その後、武藤友治訳『インド・新しい顔―大変革の胎動』（上・下二巻）としてサイマル出版会から出版された。訳語は同書による。